

NHO NEW WAVE

発行 独立行政法人 国立病院機構 平成26年 春号

独立行政法人
国立病院機構
National Hospital Organization

研修医・専修医のためのコミュニケーション情報誌 NHOニューウェーブ

vol.15
2014 Spring

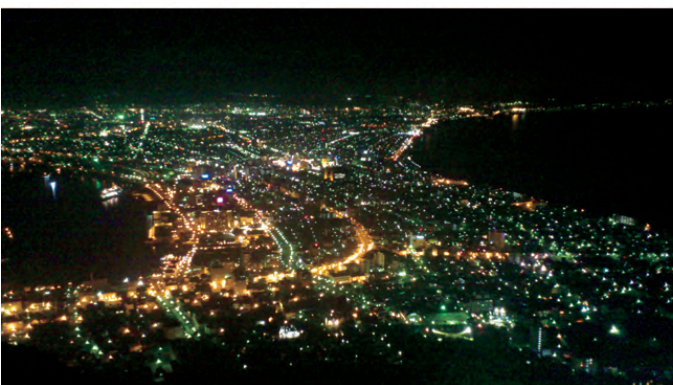


巻頭特集

SPECIAL

良質な医師を育てる研修

受講料無料、宿泊交通費支給有り



Special 良質な医師を育てる研修

2013年度開催「良質な医師を育てる研修」レビュー

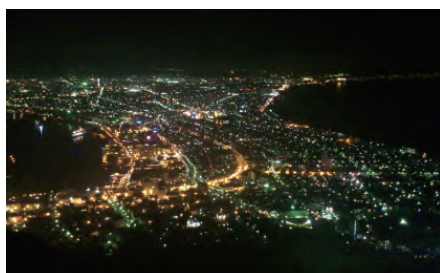
2010年からスタートした「良質な医師を育てる研修」。研修の内容や、開催数は年々進化を続けており、2013年度には17回の研修が開催されました。経験豊かな先生方のご指導が受けられるだけでなく、全国各地の研修医・専修医のみならずと交流できる絶好のチャンスです。しかも、本部から交通宿泊費が支給され、所属病院では出張扱いになる研修である点も見逃せません。これから多彩な研修を企画していきますので、ご興味がある方はぜひご参加ください！

01 6月7-8日 (函館病院) 「一般医に求められる コミュニケーションスキル研修」

今年で4回目を迎え、レギュラー研修といってもよいでしょう。講師は東海地方のNHO病院に所属する精神科、腫瘍内科、緩和ケア科の先生方を中心とした東海ドリームチームが務めてくださいます。本州はジメジメとした梅雨真っ盛りですが、函館には爽やかな青空が広がり、ベストシーズンの研修開催となりました。

研修内容はタイトルが表すように、「医師として患者さんやその家族といかにスムーズにコミュニケーションをとるか」を学ぶものです。アイスブレイキングとして、「言葉での表現方法は千差万別で、期待しているほど正確には伝わっていない」ことを体感し、その後、シチュエーションごとのコミュニケーションの取り方について、グループワークを織り交ぜながらの研修となりました。

1日目が終わったあとは、意見交換会にて北海の幸に舌鼓をうち、函館山の夜景を堪能したご一行様でした。さて、来年度はどこで開催されるでしょう？ 楽しみです。



02 7月18-19日 (岡山医療センター) 「小児疾患に関する研修」

こちらも4回目の開催となる、人気絶大な研修のひとつです。講師陣は中国四国地方の小児科スーパーチーム。1人でも多くの小児科医を育て

たいという熱い思いがみなぎった研修です。昨年と同様、腹部エコーや人工呼吸器を用いた実習に加え、座学では新たに「虐待」や「小児形成外科」「論文の読み方」など、トレンドを意識したプログラムが追加され、非常に濃厚な2日間となりました。

03 7月19-20日 (北海道医療センター) 「神経内科入門研修 ～神経の見方の基本を身につけよう～」



6月の函館も最高でしたが、初夏の札幌もベストシーズン真っ只中です。NHOが担う政策医療のひとつ、神経・筋疾患領域の研修です。こちらは全国のNHO病院のスペシャル神経内科医が講師を務め、趣向を凝らして年3回(初級・初級・上級)開催しているシリーズものです。今回は北海道医療センターの院長で神経内科医でもある菊地誠志先生自ら、研修プログラム作成から講義、要所要所までのご挨拶、意見交換会に至るまで実にアグレッシブに先導してくださいました。プログラムは、得てして自己流に陥りがちな腱反射の調べ方や徒手筋力検査、あるいは眼底の見方などをマンツーマンで教えてもらえる贅沢な実習に加え、北海道医療センターに所属する神経内科の先生方の診察風景を拝見させていただく貴重な内容で構成されていました。お楽しみ意見交換会では、「これぞ北海道！」というグルメ三昧！五感をくすぐられた研修でした。

04 7月26日 (九州医療センター) 「シミュレーターを使ったCVC研修」



知る人ぞ知る毎年大好評の研修です。シミュレーターの台数に限りがあるため、今回のように応募者多数の際は、多くの方に受講をあきらめていただく結果となりました…。本部としては「申し訳ございません」のひと言です。来年度のお申し込みをお待ちしております！

この研修はタイトル通り、精巧なシミュレーターを用いてエコーガイド下に安全にCV穿刺をする研

修です。原則として上級医と下級医のペアで参加していただき、ここで得たスキルを各施設で広めてもらいたい、というのが主催者側のねらいでもあります。アクセス抜群の福岡で開催される1日研修ですので、ぜひともご参加ください(と言いつつ、お断りすることもございます…)。

研修のメはご当地お約束の集合写真撮影です。九州ブロック職員のAさんが「今年は」上手に撮ってくださったので掲載します。



05 10月3-4日 (岡山医療センター) 「循環器疾患に関する研修会」

06 1月23-24日 (岡山医療センター) 「呼吸器疾患に関する研修」

中国四国ブロックが誇る3大研修(循環器・呼吸器・小児科)のうちの2つです。表現が盛り過ぎでは？と笑ったその貴方!! とりあえず一度受講してみてください。もう笑えませんか(苦笑)。

「立派な医師になっておくれ」という親心同然の想いから、各診療科のエキスパートによる作、演出、構成されたスキのない内容です。3研修とも、頭を回転させ、手を使い、身体を動かし、と忙しい内容ですので、あっという間の2日間となるでしょう。組織や地域を越えた同世代の仲間との出会いも、貴重な経験ですよ！

07 10月18-19日 (オリンパス研修センター) 「腹腔鏡セミナーⅠ」

08 11月5-6日 (コヴィディエン研修センター) 「腹腔鏡セミナーⅡ」

09 12月6-7日 (刀根山病院) 「神経内科基本領域スキルアップ研修」

伊丹空港のすぐそば(飛行機から見えます)、呼吸器・神経筋・難病の診療を特色とする刀根山病院で開催されました。神経内科領域のシリーズ研修のひとつで、北海道版に続いての開催です。研修1日目は神経学的所見の取り方実習、小グループに分かれての参加型セミナーで神経画像や嚥下障害についての学習を実施。2日目はハビリ室で呼吸リハやカフマシーン、言語判読器の体験、本シリーズでは初の試みとなる神経病理

の実習も行いました。

研修ラストは入院患者さんの診察でした。刀根山病院の先生方やコメディカルの方々が休日返上でご協力がさったうえ、患者さんのご協力までいただき、即効性のあるスキルを身につけることができたのではないのでしょうか。



10 12月6-7日 (北海道医療センター看護学校) 「救急初療パワーアップセミナー」

スノボを抱えた若者達でごった返す新千歳空港。バッグひとつで降り立った場違いな中年がぼつり…。毎年この時期、この場所で開催することに大きな意味がある、大人気研修を見学に行っていました。救急研修の中でも特に災害時医療の色が濃く、PTLS (Primary-care Trauma Life Support) や災害時机上シミュレーションなど、臨場感あふれる実習を盛り込んだ構成です。東日本大震災時に医学生あるいは医師であった者にとって「役に立ちたい！」という気持ちはさらに強まっていることでしょう。2日間とも実習がメインなので、自身の能力を客観評価するよい機会かもしれません。バッグひとつで札幌に来てみませんか？ 2日後には少たくましくなった自分に出逢えるかもしれませんよ。

11 12月12-13日 (四国こどもとおとなの医療センター) 「小児救急に関する研修」 NEW



ご要望にお応えし、小児救急の研修が新規開催されました。募集人数の倍の応募があったため、やむなく受講をお断りした方々も出てしまいました…。誠に申し訳ございません。

6月にはすでにNHO小児救急ワンダフルチームを結成、着々と準備を進めてまいりました。2日間の研修では、基本的知識の確認にはじまり、ショックの管理や蘇生法などの苦手にしがちな分野の講義が行われました。また、小児救急ならではの实習(骨髄針穿刺、挿管、CPRなど)に加え、小児外科～小児整形、小児脳神経外科領域まで網羅する1度で何度でもおいしい研修でした。昨年5月に新築開院したばかりの四国こどもとおとなの医療センターは、実用性に優れているのはもちろんのこと、細部にわたるまでメルヘンを忘れず、こども心を刺激するような素敵な雰囲気

院です。海を越えて、見学だけでもしてみませんか？ 病院近くでおいしい讃岐うどんも食べられますよ！

12 1月30-31日 (本部研修センター) 「病院勤務医に求められる 総合内科診療スキル」 NEW

これまた、あるようでなかった総合内科の研修が新しく開催されました。これぞ、「総合内科医ファンタスティックチーム！」と胸を張れる、東京医療センター鄭東孝先生を中心とした総勢8名の先生方は、10カ月前からじっくりゆっくりと構想を練っていただきました(受講したみなさんが「いい研修だ」と感じた時、それはきっと時間をかけて大切に育てられてきた研修だからなのですよ)。

基本的に各5人のグループに分かれ、まずは症例のお題についてディスカッションし、代表グループがプレゼンします。そして最後は、講師が診断に至るポイントと診察スキルを伝授する流れです。



特に診察スキルの場面では(写真は鄭先生の甲状腺を触診する受講生)、受講生がこぞって携帯片手に動画撮影する風景にびっくりした次第です。

13 2月13-14日 (熊本医療センター) 「救急シミュレーション 指導者養成研修」

今年で3回目の開催ですが、この度初めて東京を飛び出した「出張研修」となりました。

東京医療センター救急科の菊野隆明先生をヘッドにした救急チームによるパフォーマンスは完成度が高く、受講生もあつという間に引き込まれていきます。所属病院に救急科がない、指導できる上級医がない、自身のスキルアップに、など受講理由や経験はさまざまでしたが、充実した2日間を過ごされたことでしょう。



熊本城そばにそびえ立つ、由緒正しき熊本医療センターが所有する最新鋭シミュレーターも展示(即売はされない)され、お試し放題となってい

ました(“気に入ったら院長先生におねだりしてみてね”という意図の有無については不明です)。



この日、熊本では超珍しいという雪が降り始め、東京は大雪とのこと！羽田発着の航空便の欠航が相次ぎ、みなさん「やむなく」おまけ九州ナイトを満喫されたようです。

14 2月14日 (九州医療センター) 「膠原病・リウマチ研修」

雪降る熊本を後にして、我が愛しきホームタウン福岡にやってきました！

本研修は昨年に引き続き2度目の開催です。今回は予想を上回る大多数の応募がありました。座学オンリーのため、何とか全員に受講していただくことができました。驚いたことに、何でも標榜していそうな大規模病院の先生がたくさん受講されましたので、これからもみなさんのニーズにあった研修を企画していかねばと心に誓った次第です。NHOの豊富なネットワークを活かせば、何でもできるはず！

お約束の集合写真を掲載し、前出Aさんの功績を讃えたかったのですが、今回は撮影しなかったようです…。次回をお願いします！

15 2月14-15日 (仙台医療センター) 「脳神経疾患に関する研修」 NEW

新規の研修です。本研修は仙台医療センター救急科の上之原広司先生が立案され、構成3年、制作半年(?)という時間と気合が注がれ、無事開催に至りました。タイトル通り、まさに脳卒中中づきの2日間で、画像診断から血管内治療、神経超音波検査実習etc盛りだくさんの内容で構成されていました。天候には恵まれなかったものの、受講生の知識は大きな「恵み」により深く確実なものになったに違いありません。

メ切的都合で下記研修のレポートは掲載できませんが、どちらも昨年に続く人気研修ですので、満足度が高いことは間違いのないでしょう！

16 2月21-22日 (長崎川棚医療センター) 「神経内科研修アドバンス編」

17 2月28日 (メルパルク京都) 「重症心身障害児(者)医療研修」

最後に…。この3年間、「良質な医師を育てる研修」に関わってくださったすべてのみなさまに感謝申し上げます。全国各地の研修で出会った先生方、楽しい時間と忌憚ないご意見をありがとうございました。またどこかでお逢いできるのを楽しみにしております!! by N

Hospital 病院クローズアップ

国立病院機構

佐賀病院



院長PROFILE

馬 正義 (しま・まさよし)

1951年生まれ、79年長崎大学医学部卒業。

81年国立佐賀病院、82年国立長崎中央病院、85年医療法人和光会 恵寿病院、90年長崎大学医学部助手、92年長崎大学医学部講師、92年大分県立病院第二内科部長、2001年より国立佐賀病院に勤務。

内科医長、副院長を経て、2006年院長に就任。

日本消化器病学会認定施設指導医、日本内科学会認定医、臨床研修指導医、日本肝臓学会肝臓専門医指導医、日本消化器内視鏡学会専門医、佐賀県医療審議会委員を務める。

患者さんが中心。廊下ですれちがっても
みんなが挨拶する、人と人の距離が近い病院

当院は平成23年3月に地域医療支援病院になりました。メインは「成育医療」と「がん」です。成育医療は限られた範囲の患者さんで、ハイリスクの妊婦さんと未熟児がメインになりますが、その他には一般開業の先生方が受け入れ困難な疾患をほとんど診ています。また中核病院であるため、各科の連携がスムーズで、迅速で的確な診断および治療ができるのも特色です。

総合案内所には看護士さんを1人ずつ配置し、さまざまな案内をさせていただいています。午前中は外来中心でドクターも看護師も忙しくしているので、患者さんに何か困ったことがあっても気軽に聞ける人がいない。そんなとき、案内所に看護師さんが待機していれば、いろいろ尋ねやすいのではないのでしょうか。また、アットホームな雰囲気なので、患者さんにとって親しみやすい病院だと思います。院内には遊びの空間といえますか、ちょっとほっとできるようなスペースがあり、診療科を超えて気軽にコミュニケーションがとれていると思います。

他の病院や地域との連携は密にやっています。特色である成育医療に関しては、小児科では好生館という地域の機関病院から週に1回は外来に来てもらい、何かあればいつでもサポートしていただけのようなコミュニケーションをとるようにしています。

がんに関しては、緩和ケアのチームがありますが、診療科として精神科医がいらないなど足りない

部分もありますので、佐賀大学の緩和ケアチームとお互いに行き来しながら、月1回は合同カンファレンスを実施しています。

研修に関しては、初期及び後期臨床研修のための病院見学会を毎週行なっています。

原則として研修医1人に対して指導医が4人ついています。循環器と内科があり、内科の中にも消化器と呼吸器と内分泌代謝の3つのグループがありますが、循環器も入れてカンファレンスもするし、また1人の患者さんが複数の病気を抱えていることも多いですから、研修医はみな一緒にディスカッションしています。大学病院のように、診療科がたくさんあるところと違い、中規模病院なので1人の患者さんを3か月、4か月と担当することも可能です。そのために当院を選ぶ人もいますね。メリットとして、慢性疾患を月単位で長く診られます。入院してから亡くなるまで、場合によっては剖検まで自分でずっと診られるというケースもあります。

研修医の方へのメッセージですが、長い医師生活の中で、最初の2年間は其後の10年ぐらいに匹敵するでしょう。まず勉強する姿勢が大事です。同時に患者さんに向き合う姿勢も大切だと思いますので、そこを感じてもらいたい。患者さんとの距離を大事にしていきたいのです。べったりする必要はありませんが、離れ過ぎてもよくない。真摯に向き合いながら適度な距離感をつかんでください。

佐賀病院 DATA

■所在地

佐賀県佐賀市日の出一丁目20-1
<http://www.saga-hosp.jp/>

■病床数

292床

■診療科目

内科／小児科／整形外科／皮膚科／眼科／麻酔科／リハビリテーション科／耳鼻咽喉科／循環器科／外科／形成外科／泌尿器科／産婦人科／放射線科／脳神経外科（体診中）

■研修の特色

数多くの疾患を経験でき、そのほとんどを院内で解決できる診療体制です。中規模病院のメリットを生かし、内科の研修をしながら外科手術を学ぶなど、診療科の垣根を越えた実地医療を経験できます。また、24時間救急患者搬送受け入れの体制が整っているため、救急医療も研修できます。将来希望する科の研修に十分備えられるよう、選択科目の期間も長く設定されています。



向かいには陸上競技場



県内唯一のMFICU（母体胎児集中治療室）



NICU（新生児特定集中治療室）は9床稼働



夕暮れの有明海

佐賀病院のある街

広大な自然が最大の魅力。また有明でしか味わえない珍味も多い

玄界灘と有明海の二つの海に接する佐賀県は、九州の北西部に位置する。唐津焼や伊万里、有田焼など、古くから陶磁器の産地として知られる。

歴史観光スポットも多い。有名なのは「吉野ヶ里歴史公園」。人工的な造作は一切なく、原始的な景色が目の前に広がる。昨年春には弥生時代の森を再現した「古代の森」がオープン。数々の遺跡と豊かな緑を満喫することができる。12ヘクタールもある公園では無料の園内バスも出ており、車窓越しに古代の村や水田などの遺跡をのんびり眺めるのもいい。

干満の差が6mにもなり、広大な干潟を有する

有明海は珍味の宝庫でもある。名物ムツゴロウはかば焼きや刺身で、クチゾコは煮物で。ウミタケ、ホウジャやメカジャ、アゲマキといった他では味わうことのできない貝類もおいしい。スッポンは全国でも有数の生産地。生き血から始まる珍しいスッポンのフルコースを堪能できる。

田舎暮らしが注目を集める今、ここでは田舎体験もできる。町の70%が森林を占めるという七山には田舎暮らしが疑似体験できるコテージがある。溪流のウォーキングを楽しんだり、木々に囲まれた露天風呂でくつろいだり、あるがままの自然を体験するのもおすすめです。



Hospital 病院クローズアップ

国立病院機構

西群馬病院

患者さんが選ぶ「患者にやさしい病院」第5位に
患者さんの権利を尊重し、最良の治療に取り組む

当院は山の上に位置しており、通常なら登ってこないようなロケーションです。だから普通の病院ではやらないようなことをしないと人は集まらないという思いもあり、常によその病院ではできないことをやろうと考えています。具体的には、肺がんに関わるスタッフでいうと、肺がんだけを専門にしているスタッフが内科に6人、外科に2人いますので肺がん医療に関しては充実していると思います。

看護師さんとても気がいいというか、やさしいですね。緩和ケア病棟を立ち上げるとき、以前からずっと告知の問題や院内のターミナルケアの勉強会などに取り組んでいたのが、話が来たときにすぐに「やります」と答えたものの、採算が取れないのではとか、スタッフを相当教育しなければならぬなど、いろいろ困難な問題もありました。でも私は、緩和ケア病棟を通じて、患者さんの思いや気持ちを聞く、インフォームド・コンセントについて考える、病名告知の仕方について取り組むとか、そういう問題を突き詰めていくことで病院の質も上がると思ったのです。結果的に国立病院機構全体でやっている患者さんのアンケートでも、私たちの病院はドクターやナースに対する満足度がとても高く、スタッフがやさしくてよく話を聞いてくれると評価されました。緩和ケア病棟との相乗効果でしょう。

一方、土地柄なのか、この環境がそうさせるのか分かりませんが患者さんもやさしいと思うことがたくさんあります。たとえば退院が決まった

患者さんが、同じ病気で入院した患者さんと接するうちに、「いろんなことで助けてもらったから、退院が決まった自分も何か人のためになることをして帰らなければいけない」という思いを持ってくださるようで、手術を決断できなかった患者さんを説得してくれたということがありました。そういうケースを見聞きすると、身体は衰弱していても、人は最後まで成長できる、精神は成長し続けるのだと感じます。そしてそういう出来事に触れながら、我々もスタッフも成長していくし、多彩な経験を積んで病院は成り立っていくのだらうと思いますね。

研修医の方にはぜひ、病気を診るだけではなく、まず人間を診て欲しいと思いますね。たとえば、高血圧という病気を診るとき、私たちは高血圧の原因を治療しているけれども、その人は高血圧を持っている人間であって、ほかの病気を抱えているかもしれないし、他の悩みもたくさん持っているかもしれない。つまり病気だけを診るのではなく、病気を抱えている人間全体を診て欲しいと思うのです。

そのためには、いい先輩に巡り会うことがとても大事です。本人の努力はもちろんですが、やはり、周囲の人がやったことを自分の目で見て学習し、身をもって知ることが多いと思います。そして教育者自身も人格なり、全人的な対応ができることが大事だと考えています。



群馬県の地域医療再生計画において県北部の基幹病院として期待されている渋川医療センター。市立病院を統合し新築整備、免震構造、地下1階地上7階450床の病院として平成28年4月開院予定。



齋藤 謙三 (さいとうけんせい)

1952年生まれ、78年群馬大学卒業。

81年国立がんセンター肺病研修、82年から西群馬病院に勤務し、呼吸器科医長、副院長を経て、2003年院長に就任。

群馬大学医学部臨床教授、日本呼吸器学会専門医、日本呼吸器内視鏡学会専門医・指導医、日本内科学会認定医、日本臨床腫瘍学会暫定指導医、日本がん治療認定機構暫定教育医、日本緩和医療学会暫定指導医、日本肺癌学会関東支部会幹事、日本呼吸器学会代議員、日本緩和医療学会監事、日本ホスピス緩和ケア協会監事、群馬癌種子治療検討委員会肺高部会副会長、群馬県がん診療連携拠点病院連絡協議会緩和ケア在宅専門分科会副会長、群馬肺癌研究会会長、群馬緩和医療研究会代表世話人、国立病院機構院長協議会関東信越支部会副会長、国立病院機構院長協議会情報化推進委員会委員長、国立病院機構肺病研究会副会長を務める。

西群馬病院 DATA

■所在地

群馬県渋川市金井2854番地

<http://www.hosp.go.jp/wgunma/>

■病床数

380床

■診療科目

呼吸器内科 / 消化器内科 / 血液内科 / 呼吸器外科 / 消化器外科 / 乳腺・内分泌外科 / 整形外科 / リハビリテーション科 / 麻酔科 / 放射線科 / 病理科 / 緩和ケア科 / 精神腫瘍科 / 小児科 (重症心身障害児 (者))

■研修の特色

当院は「がん専門病院」として県内全域のみならず県外の肺がん、難治性肝疾患、乳がん、血液疾患をはじめとする各種がん患者、結核患者の治療等に重要な責任を果たしています。また、「がん診療連携拠点病院」、「地域支援病院」として、がんの始期から緩和ケア医療にいたるまで、がん疾患へのトータルな対応で地域医療に貢献しています。主に肺・胃・肝・大腸・乳・血液造血器などのがんの診断・治療と緩和医療を研修することができ、各分野ごとに専門医を目指すことができます。



緩和ケア病棟 中庭



緩和ケア病棟 入口



緩和ケア病棟 個室



75名の大軍団を組み渋川へそ祭りに参加

西群馬病院のある街

日本列島の中央に位置する、「日本のまんなか、へそのまち」

群馬県渋川市は県のほぼ中央に位置する。首都圏から約120キロの距離にあり、アクセスもいい。有名な温泉では「伊香保温泉」がある。温泉街のメインストリートには365段にもおよぶ石段があり、両脇には温泉宿やお土産店、遊技場が並ぶ。

市街地から伊香保温泉を結ぶ県道沿いには美術館やアミューズメントも多い。ガレの美術館や竹久夢二や小林かいちなど現代日本画を展示する伊香保保科美術館がある。その隣には牛の乳しぼりや乗馬が体験できる伊香保グリーン牧場があり、その一角には日本でも珍しい牧場の美術館、ハラミュージアムアークがある。また、周辺には標

高460mの高台にあり、関東平野と谷川岳をはじめとする山々が一望できるスカイランドパーク、おもちゃの博物館、自動車博物館などがある。

群馬県はうどんも有名だ。水沢うどんは日本三大うどんと言われ、水澤観世音の参道両脇にはたくさんの水沢うどん店が並ぶ。コシの強い麺はごまだれやしょうゆだれにいただくことができる。

日本の、さらには群馬県の中央に位置することから、「日本のまんなか渋川へそ祭り」というユーモラスな腹踊りで地元民に人気の祭りや、伊香保温泉で開かれる「伊香保ハワイアンフェスティバル」など、特色あるイベントもさかんな地域だ。



集中的に学びたい専門分野を 希望のNHO病院で経験—「NHOフェローシップ」。



岡山医療センター 小児科
高橋亨平



NHOフェローシップ 小児科アレルギー研修プログラム

■ 概要

一般小児疾患の診療をベースに、食物アレルギー・気管支喘息・アトピー性皮膚炎などの小児アレルギー疾患を集中的に学ぶ。

■ 内容

小児アレルギーの診断に必要な基礎知識、検査法、疾患や重症度に応じた治療法の基本を修得、肺機能検査・食物経口負荷試験・アレルギー免疫療法などの意義と方法、解釈を学ぶ。また、小児科診療における問題点を発見、解決する能力を身につけ、学会発表、論文発表などにもつなげる。

■ 取得手技

小児アレルギー疾患における各疾患の診断基準を理解し、的確な診断および重症度に応じた治療、各疾患に応じた患者指導を修得。また、アレルギー疾患の初診診療や肺機能検査・食物経口負荷試験の方法に関する程度修得する。

■ 期間と募集人数

6カ月間、1名

■ 診療科の指導体制

診療科医師数：常勤7名
診療科研修の指導にあたる医師：7名

■ 診療科の入院実績

食物アレルギー：1000件
アトピー性皮膚炎：50件
気管支喘息：50件
食物に対する経口免疫療法：50件
環境抗原に対する急速免疫療法：20件
※件数は年間入院数を示す

■ 共通領域研修

臨床カンファレンス（週1回）
アレルギー初診カンファレンス（週1回）
研究カンファレンス（週1回）
抄読会（週1回）
臨床研究センター（抄読会・検討会：それぞれ月1回）

国立病院機構では全国に広がる143病院のネットワークを活かし、研修医・専修医のみなさまのスキルアップを応援する「NHOフェローシップ」を用意しています。希望に応じてより専門的な経験と知識が効率的に学習できる充実の内容です。今回は相模原病院の小児科で研修を受けられている高橋亨平先生にお話をうかがいました。

専修医の声

小児アレルギーに特化した内容が魅力。 診療や検査法の基礎がじっくり学べます。

——応募したきっかけは？

岡山医療センターの先生に「NHOフェローシップ」の存在を教えられました。機構内で希望の病院があれば研修に行ける制度があると。アレルギーに関して勉強したいと考えていたので相模原病院はぴったりでした。現在、指導をお願いしている柳田先生に直接、打診したところ、受け入れもらえることになりました。

小児科に進んだのは、父が小児科医で学校医もしていた影響です。保健室に行くとき父が診てくれるのが嬉しかったし、誇らしかった。また、妹はアトピーがひどくてずっと治療を続けていました。食べ物の除去も必要で、卵白が食べられないんです。たとえば目玉焼きが出て妹が卵黄を食べ、僕が卵白を食べるとい感じでした。当時は不満でしたが、妹の悪い状態が長かったので、以前からアレルギーには関心がありました。父のように、自分の子どもも自信を持って診られるようになりたいと思っています。

——職場としての環境と居心地は？

研修に来る前は不安でした。アレルギーの最先端の病院で第一人者の先生方もたくさんいらっしゃるし、病院が変われば診療システムも変わるはず。馴染めるかどうか心配でした。

でも、実際にお世話になってみると、どの先生も優しく教えてくださいました。今まで抱いていたアレルギーに関する疑問に対しても明快かつ具体的に答えてもらえます。なんでも気軽に聞いて相談できる環境はありがたいですね。

最初の2カ月は病棟を中心に、入院患者さんの食物負荷試験について学びました。患者さんによって卵より牛乳を先にテストするとか、量的にはこの程度など、カルテだけでは理解しにくい部分ばかり、非常に参考になります。これからは外来診療にも関わらせていただくので、検査の順番、親御さんとのコミュニケーションやヒアリングの仕方などを

勉強したいですね。血液検査の結果説明など、今まで不十分だったことができるようになって帰りたいです。

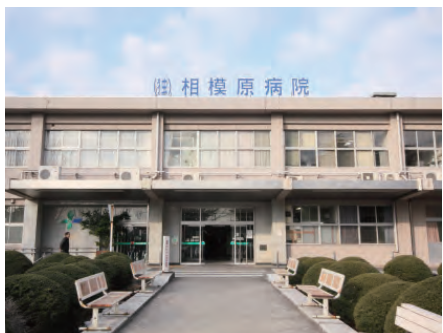
岡山医療センターは24時間体制で、救急外来に小児科医が交代で待機している状態でしたが、こちらでは相模原メディカルセンターがその役割を担ってくれています。夜の当直がないオンコール体制なのは新鮮ですね。

僕は初期も後期も同じ病院で研修していますが、他の病院を経験するとさまざまな発見があります。ずっと当たり前だと思っていたことに別の見方があり、違う方法もあると知りました。可能であれば、3年目・4年目のうちに別の環境を知っておくのは非常に勉強になると思います。特にこちらのように専門性の高い病院での研修は価値がありますし、将来、役立つと感じています。

——小児科医のやりがいとは？

具合が悪い子が回復したり、長期入院していた子が無事退院して、外来で元気な顔を見せてくれたりすることが一番嬉しいですね。お母さんが写真を送ってくれたり、本人から手紙が届いたりすることもあります。良くなった姿を見るのが何よりですね。大人の患者さんであれば悪い部位の専門科を紹介し、別の場所が悪くなれば転科するのが一般的です。小児科の場合、その子をしてできるだけ長く診ることになります。腎臓が悪ければ腎臓を、呼吸器が悪くなれば肺の治療と一緒にしながらというように、1つの科で完結して1人でずっと診られるのが魅力ですね。

夜中の2時3時になって緊急事態が発生することもある職場です。病状の急変や急患もあるでしょう。そんな時、患者さんや看護師さん、後輩の研修医が声をかけにくいドクターにはなりたくありません。あくまで理想ですが、深夜でも連絡があったら笑顔で対応できる度量の大きい医師を目指したいと思っています。



相模原病院外観



小児科病棟内プレイルーム

高橋先生のある1週間のスケジュール

	月	火	水	木	金	土	日
8:00							日当直
9:00							
10:00							
11:00							
12:00		休	憩			日当直	フリー
13:00						月に3回程 オンコール	せつかく関東にきているので、仕事の合間に観光に行かさせてもらっています。岡山から車を持ってきているので車でスカイツリーを見に行ったりしてみました。
14:00						月に1回 当直があります。	
15:00							
16:00							
17:00							
18:00							
19:00							

- 回診、研究カンファ
- 病棟、病棟当番、学童外来
- 外来当番（処理・初診・見学など）、初診カンファ・抄読会
- 入院負荷試験、外来負荷試験、負荷試験結果説明
- 準備、休憩、自習、サマリー、事務作業など



高橋先生が暮らしている官舎。相模原病院から徒歩数分と近く、3DKと広い間取りの官舎で、充実した研修の日々を過ごしています。また、岡山にいた時は院内の食堂・売店に頼りきりでしたが、こっちにきてからできるだけ夕食を作るようにしているとのこと。

指導医の声

食物アレルギーの患者数は世界一。 実践的な研修プログラムを用意しています。

相模原病院の小児科には、経験と専門性豊かな医師が17名所属しています。慢性的な医師不足に悩まされる小児科医療の現状では、かなり充実した診療体制だと思います。

また、小児アレルギー部門は特に充実していて、各種アレルギー疾患の診療体制が整っています。病院にはアレルギーに関する基礎研究を行う臨床研究センターが併設されており、同センターとの連携の下、最先端の医療の提供に努めています。中でも食物アレルギーについては世界一患者数の多い病院です。膨大な過去データが蓄積され、データベース化されています。学会報告や内外での論文発表の件数も国内有数で、院内の研究活動や厚生労働省の研究グループへの参加も活発に行われています。充実した研修には、環境（多様な症例・症例数・診療体制など）、時間（研修に集中できる十分な期間と学習時間）、良き指導医の3つが必要だと思いますが、当院は患者数も多く、多彩な症例を経験することができます。各種データも整備されており、自己学習や研究に宛てる時間の余裕もあります。アレルギー治療におけるリーダーの1人、海老澤元宏医師を含む優秀な指導医が揃っており、チーム体制で指導します。

「NHOフェローシップ」では、半年間で一定の成果が得られるよう食物負荷試験を中心とした実

践的なカリキュラムを組みました。たとえば、当初の1か月程度は食物負荷試験を実施する時や病棟・外来での診療活動の際、必ず先輩医師がつき、一対一で指導します。それ以外の場面でも、小児科の先輩医師の全面的な協力を得て、随時その場で質問したり、指導が受けられたりするようにしています。小児一般疾患を診療しつつ、アレルギー疾患を勉強したい若手医師に最適な環境を用意しています。

当院で研修を受けた方に対しては、研修終了後も、必要があればサポートを続けます。専門的な診断や治療について迷った場合などには、連絡をいただければ、一緒に考え、解決の糸口を探るお手伝いをします。

また、今後は1年に1回、研修経験者などを対象として食物アレルギーやその関連症例の診療に役立つ勉強会を定期的に開催していく予定です。当院を離れた方にも最新の知識や情報を提供し、現下の食物アレルギーの診療に対する取り組みや課題などについて一緒に研究する機会を持ちたいからです。

今後、このような勉強会の開催を含め、様々な形で当小児科からの情報の発信にも力を注いでいきたいと思っています。



相模原病院 小児科 医師
柳田紀之

子どもの頃の夢

医者



Special 特集：救命救急センター(東日本編)

政令指定都市・仙台の救急医療を担い、 基幹災害拠点病院としての使命を果たす。

突然の事故や病気、中毒などに対応し、24時間体制で診療にあたる救命救急センター。国立病院機構では関連機関と連携し、救急医療にも積極的に取り組んでいます。今回は人口150万におよぶ仙台医療圏に位置し、年間救急車搬入4000件以上、救急外来で9000件を超える救急患者を受け入れている仙台医療センターの上之原広司救命救急部長にお話をうかがいました。

救命救急のメインは 交通事故から高齢者対応へ

当院の救命救急センターは年間4000件以上の救急車搬入の実績があります。救急専門医は5人。うち3人が救急科に所属しています。平日中の救急車の受け入れは救命救急部が担当。消防局司令室や現場救急隊からのホットラインの対応、転院などの窓口となって初期治療にあたり、必要がある場合は各専門診療科に診てもらったりアージをしています。

最近の傾向としては、救急車の搬入件数こそ減少しているものの、重症例が多く、入院比率が年々増加して6割を超えるようになりました。中心は仙台医療圏ですが、脊髄損傷、中毒、多発外傷が県下一円より紹介されており、周辺の医療機関からは高度医療を提供する三次救急医療施設としての役割を期待されています。

外傷に関しては交通事故より高齢者の転倒や転

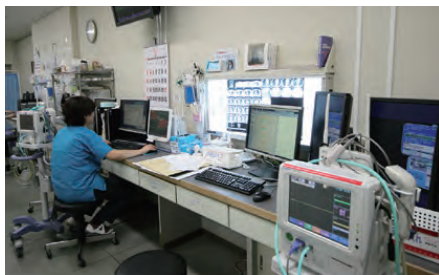
落などの割合が増え、搬送される患者さんの平均年齢が明らかに上昇しています。脳卒中やその他の救急も高齢者が主役になりつつありますね。高齢者の場合、持病があるなど、単科では対応しきれないケースが少なくありません。救急医療の幅広い専門性に加え、周辺各科と連携する必要性が高まってきました。チーム医療を推進していくうえで救急部門は要となります。専門的なスキルに加え、交渉力などコミュニケーション能力も求められますね。

県の基幹災害拠点病院として 今後ますます高まる役割

当院は宮城県の基幹災害拠点病院に指定されています。県では隣接する宮城野原運動公園を広域防災拠点と定め、整備計画に着手しました。平成29年1月にはそちらに新築移転します。救命救急センターの増床が予定されていますし、導入が決定したドクターヘリの基地病院として新たな役



ICUでの処置の様子



救急外来

研修医コメント

緊急の場面に身を置くことが自信に。 医師として息長く働いていきたい。

仙台医療センター 救急科
加賀谷由里子

子どもの頃の夢

フライト
アテンダント



初期研修2年目です。当院は三次救急ですが、風邪から交通外傷などの重症患者まで幅広く診られるので初期研修の病院として非常に充実した環境だと感じています。救急科は1年目にも1カ月半いましたが、当時はすべてが新しく対処するだけで精一杯でした。今は次に何をすべきかとっさに考えて行動できるようになった気がしています。1年目は点滴を刺すところから教わり、2年目は気管挿管など、より高度な手技が自然とできるようになりました。たくさんの先輩たちに支えていただいて感謝しています。

研修が始まる前は現場がこわくて、来月から仕事だと思うと気分が落ち込んで不安だったんです。でも結局、緊急の場面に身を置き、経験したことが自信につながっていく。最初は心配でも日々の業務や当直に積極的にに関わり、とにかく回数をごこなしていくことが大事なんです。

先日、交通外傷で若い男性が運び込まれてき

ました。大きな事故で骨盤骨折があり、出血もかなり多量だったため、一時は危機的状况でしたが、他科の先生方のサポートもあり、救命につながり、本当によかったと思いました。その半面、生きるか死ぬかの瀬戸際で搬送される患者さんが多いので、家族に会えないまま亡くなる方もいらっしゃいます。後から身内の方が到着し、対面なさった時の姿を見るのは胸にせまるものがあり、とてもつらい気持ちになります。

後期研修は診断学に興味があるので放射線科や病理学科を考えています。活躍されている女医さんも多く、救急も魅力的なジャンルですね。ただ、女性の場合、志望と仕事量の兼ね合いが難しい…。今後、結婚・出産もあるでしょうし、将来を見据えながら進路を決めるつもりです。医師という仕事にやりがいを感じているので、辞めずに続けていきたいと思っています。

割を担うことになるでしょう。

現在は仙台市から松島・石巻・塩竈といった宮城県東部の沿岸地域が中心ですが、ドクターヘリのターゲットは全県です。今後は仙台医療圏以外のエリアとの連携がますます必要になってくるでしょう。災害医療に関しては、日本DMATのメンバーとして仙台市や宮城県の総合防災訓練に参画していますし、洋上からの救急要請に対しては、海上保安庁・航空自衛隊と協力しつつ、年に数回、救命救急医を派遣しています。

最近の急患で一番多いのは外傷全般。次に脳卒中をはじめとする神経救急です。大学病院と並ぶ幅広い診療科を持つ総合病院として、今後は循環器・消化器・呼吸器内科系の救急にも力を入れていきたいですね。特に高齢者は全体が診られないと救急対応も困難なので、一部の専門に特化するのではなく、救急全体でしっかり対応できる体制を目指していきたいと思っています。

当院では初期研修の1年次・2年次それぞれの救急科研修があるプログラムになっています。多彩な症例を通して医師の基礎を築いてほしい。私が研修医の頃は病院で寝泊まりするのが当たり前で、院内で生活するような時代でした。今とはシステムが違いますが、患者さんと四六時中向き合うという点では意味がありましたね。進路にかかわらず、患者さんをしっかり診る。それが良い医師になる一歩だと思います。



独立行政法人 国立病院機構
仙台医療センター 救命救急センター DATA

■ 病床数 (要確認)
18床 (うちICU6床)

■ スタッフ
医師5名 / 看護師50名

■ おもな設備

救急ICU / 人口呼吸器 / 血液透析装置 / PCPS / IABP / 内視鏡装置 / 低体温療法装置 / 多目的電気生理モニター / 頭蓋内圧モニター / 超音波診断装置 / 血液分析装置 / Vigeo / Vigilance など

■ 所在地

〒983-8520 宮城県仙台市宮城野区宮城野2丁目8番8号
TEL (022) 293-1111 (代) FAX (022) 291-8114
<http://www.srn.go.jp/>